西日本の土偶出現期と土偶の祭式

賀 川 光 夫

はじめに

最近九州の各所で分銅形土偶が縄文後期磨消縄文土器終末期（鐘ヶ崎式土器—西平式土器）に出現することがわかるようになった。これらの土偶は，扁平な土版型で左右の刳り入れ部をもって上・下体を分離し，上・下を組合わせて人形を暗示させる。したがって後期精整磨研土器（三万田式—後領式）にみられる妊娠女人形，体部誇張の土偶を表現するものと違って，それを暗示する粘土版である。

土偶については，一部を除いて初めから女人形象の土製品で，特に受胎を具象して女性の一部を誇張した造形に終始している。更に興味深いことは土偶祭式によって女体は破壊分断されて放棄されている。この破壊分断の儀式が土偶そのものの意味を物語るが，その目的は再生えの祈願であるとされる。このような土偶祭式については違った考えも表明されている。妊娠つまり受胎という女性的世界を大地，植物の芽生とする豊饒神の偶象として受けとめようとするもので，中東地方発見の地母神的祭式呪術具とみなすことである。

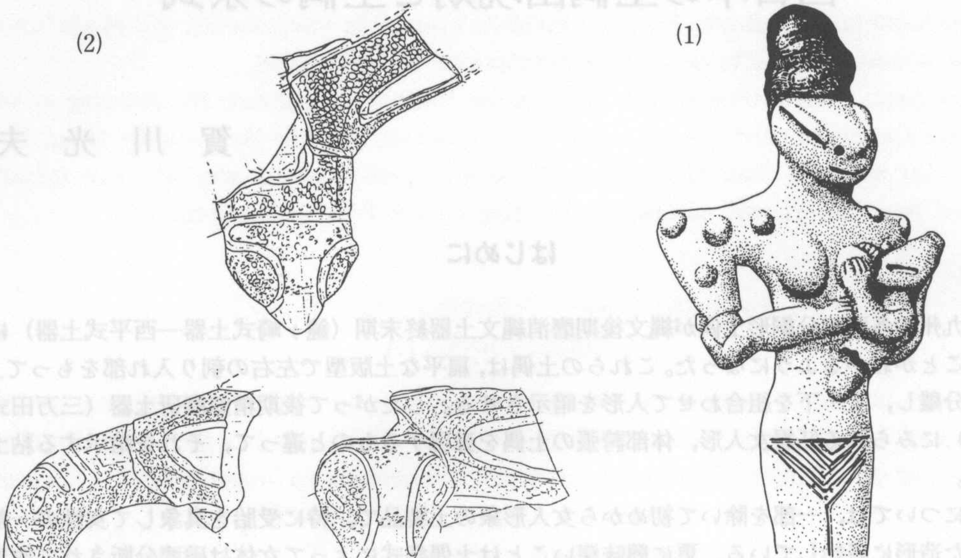
土偶はいずれにしても奇怪な女人偶像であり，女人世界の神秘的生命の表現と，その破壊(殺害)を如何に解釈するかにおいていささか興味深い。

1．蛇神像と母子像

女体偶象，ヴィナス像の古形はオーストリヤ，ヴィレンドルフ出土の石偶である。乳部，腹部，臀部をいちじるしく誇張した女人像で出産(多産)，豊饒の呪術によるものと考えられている。実事豊饒についての祈願，呪術は，中東のザグロス，アナトリヤ地方から死海一帯の高地におけるムギ作の開始とともに形成されたといわれている。大地と女性によるすべての生命の誕生，即ち地母神の造形である。ウバイド文化は前五千年メソポタミヤに発達した初期灌漑農耕で高い生産を得ることができた。ここで注目すべき地母神は母子像(1)〔第1図(1)〕で，母神の顔は蛇像を象り，体部には斑点もみられる。左右の乳房は大きく表現され，左手で赤子を抱く。赤子は両手で乳房をかかえ乳を飲む状態をあらわしている。母神像についての蛇頭，蛇体については次のように解説している。

「蛇は水と関係し，脱皮を繰り返すことから，再生のシンボルともなり，後のシュメールやエスラムでは，土器の文様や，シリンダーシールの文様として多様されている。」

としている。蛇頭，または蛇体の文様が縄文中期土器の口縁文様にもちいられ，それが生産の具象と考えられ，蛇体の文様が農耕の開始に関係ありとした江坂輝弥(2)はそれを中期農耕論の一根拠としている。江坂は「世界の石器時代遺跡で蛇のモチーフを使った土器や土製品があらわれるのは，一般的にみて原始農耕が始まってからのことである。勝坂式土器の文化圏に江南地方から芋栽培が伝播したと考えるならば，経由地と目される九州，中国には打製石器，石皿がなくてはならないが



第１図　(1)蛇頭泥像（ウバイド出土地母神ウル出土『最古の像形，一地母神像の系譜』古代オリエント博物館1988より）と(2)蛇頭把手・縄文中期（大分県浜遺跡出土，宮内克己実測）

不明であり，降雪量の多い中部山岳地方の冬期の保存食量としていたと考えられる。この植物的食料資源の豊産を祈る対象物として地母神信仰にも関連する土偶の製作がさかんになった。環状列石の如き構築物がつくられ，蛇に対する信仰とともに蛇をモチーフとした土器がつくられた。」

としている。江坂は蛇の信仰と地母神との関係を広義の勝坂式土器の分配圏に求めている。九州では大分県東国東部国東町浜遺跡から縄文中期土器の口縁に蛇頭文様[3]〔第１図(2)〕が施されている。蛇については北シリヤ出土，前2000年の地母神にもみられる。両眼大きな同心円形の蛇頭で首が長く奇怪な像であるが左手には蛇を握る。このように中東の地母神には蛇頭のものが少なくない。

第２図　首を分断された母子像土偶，八王子市宮田出土（縄文中期勝坂式，文化庁蔵）

母子像としての地母神はウバイド文化以外にも多く，アナトリヤ出土の前5500年の像には両手で

子供を抱く座神像がある。母子像は縄文時代の土偶〔第２図〕にも若干存在し，生産神として共通の資料として指摘される。

中東の母子像は１～３世紀頃イラン北部で数多くみつかっており，ここでは女神の首の部分を折損させる何らかの祭式があったものとみられる。したがってこの泥像破損の祭式は縄文時代の土偶が体部破壊分断，破砕放棄をおこなうことで類似し注目される。泥像の首の分離放棄の地母神処理の方式には多くの意見があるようであるが，中東では１～３世紀の頃まで例がなく，それまでの地母神との間に生産信仰（呪術内容）に何らかの違いがあったのかも知れない。この地母神破損分断については，民俗事例として15世紀のタイ中部，スコタイ地方で焼かれた泥像があり，泥像破壊による生産呪術の問題と併せて注目される。

第３図　タイ国北部出土，陶製母子泥像（トカァタ窯）

2．タイ北部陶製泥像

タイ国スコータイ地方は，13世紀前半にクメール（カンボジヤ）から独立し，スコータイ様式の仏教芸術を発展させた。14世紀にはクメールや中国陶磁の技術が伝わり，スコータイやスワンカロークで磁州窯風の白地鉄絵，青磁が生産され，日本で宋胡録（すんころく）の名で流通した。この地方のスサッチャナライ Sisatchanlai 附近では泥像を製造するコーノイ窯[(4)]（Koh Noi Kiln）をはじめ，Chaleshin, Tukhata などで数多くの泥像を製産する窯があった。

泥像（Tukhata Seaka Ban. 頭を分断する人形）は一般に俗神の対象として広くもちいられていたが，最近は陶芸家の間で流通している。この泥像を見学できたのは1982年，スサッチャナライ古城の発掘現場見学の帰途で，古城跡周辺であった。ここで説明された泥像は，⑴生産神としての女性像，⑵生産と死，そして再生の輪廻神としての崇拝，呪術，⑶病気治癒。いずれも泥像は首を切り生産・再生，病気の苦悩を移す呪術泥像として破壊放棄されるということであった。

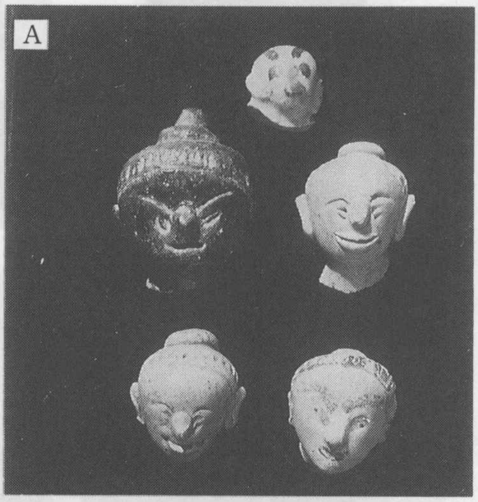
⑴ 1982年1月スサッチャナライ窯跡発見といわれる泥像2点〔第3図〕を見学できた。Aは高さ9センチ，砂粒の多い胎土を使用し，手造りの母子泥像である。仕上げには上半身のみにクメール系の釉彩（鉄釉を厚くかける)。頭は後方固結び，顔は眉眼，口の周辺に黒釉で隈取りをする。両手を胸前で組み赤子を横にして抱き，赤子は豊満な肉付きの乳房を吸う。

下半身は右足，膝を立てて右尻後方に屈して置き，左は屈して腹前に置く。側面は上半身扁平で乳房部が前に突出，下半分は臀部左右に張り，女体を誇張する。

Bは高さ11センチでAに比して高く，砂粒の多い胎土を使用して母子泥像を象どる。薄く透明釉をかけた上半身は写実的に造作されている。顔には隈取りがなく，頭の後方で結ぶ髪をふくめて丸味があり，彫りは深い。胸の張りも豊かで両手で赤子を抱き当乳の形をとる。下半分には釉薬はなく，左足屈して下腹に置き右は膝を屈して足先を右尻脇に置く，泥像は空洞で丸棒に粘土を巻き付けて造形した可能性がある。

A, Bの他にも数点の泥像をみたが，一部には素焼の像もあり，女人像には単身像，母子像があり一般に座像で，女性特有の誇張があった。

⑵ スコータイはじめスワンカローク周辺の農村，スサッチャナライの古城附近には，泥像の出土が多い。この数点の泥像〔第4図(A)〕はコー・ノイ窯近くで出土し，体部と切断されたものである。出土品は一部褐釉を，大多数は透明釉をかけて仕上げた女性像である。これらについて地本の陶芸家は，妊娠，出産と同時に母子泥像を破壊し（首を切る)，泥像に生涯苦をのり移させる儀式がおこなわれた，と説明された。周辺の農民には出土した泥像の首が何故折損さ



第4図 タイ国北部，陶製土偶（体部分断）

れるのか用途について細しく知る人はなかったが，除魔呪術という共通の認識はあった。

(3) 男性泥像２点〔第４図(B)〕であり，それによって男性像も製作されていたことがわかる。男性像はいずれも首を切断され表情に病的ゆがみがみられ，頬の附近に瘤状の大きな塊がある。瘤状の腫れのある位置から歯の炎症による激痛ヶ所とみられるが，この張れ瘤は一部の病気ではなくすべての病状を指すといわれる。男性泥像の首の切断は，病気を泥像に移すためと釈解される。

右の三種類の泥像はスコータイ一帯に広く分布し，出土するが，コー・ノイ，チャリシン，トウタカ窯などで製作されたと推察される。この泥像の使用については，次の三つに分けて考えることができる。

1. 大地における生命の芽生は女性的世界から生まれる，という大地の神・地母神としての信仰
2. 生命の再生，輪廻についての宗教的祭式呪術における信仰
3. 生活苦，病気転移のための呪術泥像

である。

さて１の地母神的性格の泥像については，この地方が中東，インダス地方[5]から東に延び，南西アジアに通ずる地域として影響があったとも考えられる。しかし一般的にみて地母神は砂漠と草原地帯に生まれたムギ作農耕地帯に発した泥像である。これに対してタイ地方はモンスーン地帯にあって稲を栽培する。大地（女性）生産崇拝の地母神と違って生命の輪廻を重視することになると思う。受胎，妊娠，誕生……死の過程を輪廻の祭式で生命の回復をおこなうために泥像の首を落す祭式で基本的には縄文時代の土偶と共通するところが多い。

北部タイ稲作地にみられる泥像崇拝はバンチェン遺跡出土の泥像にはじまり起源は新石器時代である。ここにあげた泥像は15世紀初頭の泥像窯で焼成されたもので泥像がクメール特有の鉄釉陶器であることからみてその起源を古くみて14世紀とする。クメール施釉の源流を求めればタイ東北部，インドシナ半島への展開は不可欠であると思われる。泥像信仰は単に生涯の苦悩転嫁や，病気転移というより，生命の輪廻に関する食物再生の問題として深く農耕社会に根付いた問題のように思える。

今日タイ北部で出土する14～15世紀の泥像信仰は起源をバンチェン文化に求められ，縄文時代の土偶祭式に似た内容をもつと思われるところから，その内容を深めることには意味がある。しかし，両者の空間的断絶はあまりにも大きく，それだけに不安もあるが，稲作地帯にみる泥像信仰として興味深い。

3. 稲作開始期の東南アジア

八幡一郎[6]は1957年９月から翌３月まで「東南アジア稲作民族文化総合調査団」の一員としてタイ，ラオス，カンボジヤ３国を旅行された。カンボジヤのアンコール近くシエムレアップ西方2.3キロの川端に稲に似た草が簇生していたのをみつけた。同道した農学者長重久はそれを野生稲と断定され，採集場所を確められた。そして八幡は次のように述べている。

「野生稲の中の幾つかの品種を栽培して食料としての米を収穫する技法が次第に定着したのは恐らくこのヒマラヤ山脈から東に続く山地の南において発達したに相違ないと考えた。」

最近渡部忠世は雲南一帯の東亜半月弧地帯に原始稲[7]があり，南はメコン川，東は長江を下って中国江南地方に普及[8]すると述べている。この経路について八幡は更に次のように述べている。

「日本に稲作が将来されたのは秦漢のころである。早くから稲作農業が普及した華中，華南の方面，就中呉越の地から渡来者によってもたらされ，秦に続いて漢の国家統一における動揺，更に呉越七国の乱は少くとも漢族ならぬ華中，華南の住民の生活不安をまねく。その中で洋上脱出がおこ

なわれた。近年ヴェトナム住民の政治圧力により故地を棄て洋上を漂うのと相似る。」

八幡によれば稲作は江南から対馬海流を北上，一部は北部九州，そして一部は朝鮮半島西南海岸に到達したとの貴重な考えを述べている。今日稲の来た道について二つの有力な説がある。一つは八幡の説く，江南九州のルート，二は最近山東省栖霞県楊家圏遺跡(9)第6号灰杭から出土した稲穂から，山東，朝鮮半島中部を結び半島を南下して九州に伝播したとみる山東ルートがある。

八幡の説は有力な根拠にもとづいている。それには岡崎敬「コメを中心としてみた日本と大陸」(10)の論文が根拠となっている。岡崎は中国各地のコメや稲茎の出土状況を調べ，更に検討を加え稲作農耕とその文化についての細論をおこなった。八幡は岡崎の中国における研究に加えて自から調査をこころみた東南アジアの稲作伝播を考慮してくだした推論であるだけに価値ある見解となっている。

稲の収穫には石を磨いた石庖丁を使用した。これは秦漢時代の襲用であることも事実で，中国，朝鮮南部地方と共通している。中国河北省裴李崗遺跡(11)はアワ作で7000年前，浙江省河姆渡遺跡(12)跡は稲作で6,000年前といわれる。裴李崗遺跡には石鎌がみられ，河姆渡造跡では石庖丁が出土し，これらによって穂刈りがおこなわれていたものと推察される。渡部忠世(13)は，「稲作の重層構造」について次のように述べている。

「早稲，中稲，晩稲と収穫期の違う稲をまぜて播くやり方がある。これは陸稲栽培のやり方で，収穫は稲の穂だけを刈る。中稲，晩稲を順に刈ることになるが，いずれも小さなナイフを使う穂刈りである。」

稲作に穂刈り具を使用したのは，日本に稲作が伝来した当時の中国，朝鮮半島南部で共通であった。収穫は稲作において大切で，収穫に関する祭礼は各地で行われた。しかし東南アジアでは生産，収穫のための祭式に泥像を使用することは見聞しない。最近までインドネシヤ，ロンボク島のアニアニとよぶ収穫具は牛角で鞘を作り，一辺に小さな鉄刃を挿入して，そこで稲を摘み取る。鞘には動物や偶像を彫刻しており，鞘の一部を穿孔して骨柄をつけているが，その柄頭にも，神像が彫刻されている。この神像は女性像ではないが，収穫神とみてよい。この地方でも泥像信仰はやらない。

タイ北部の泥像信仰であげた資料は14～15世紀で起源はバンチェン文化の泥像とされるが，その源流も，周辺への拡散もいまのところ明らかでないのである。

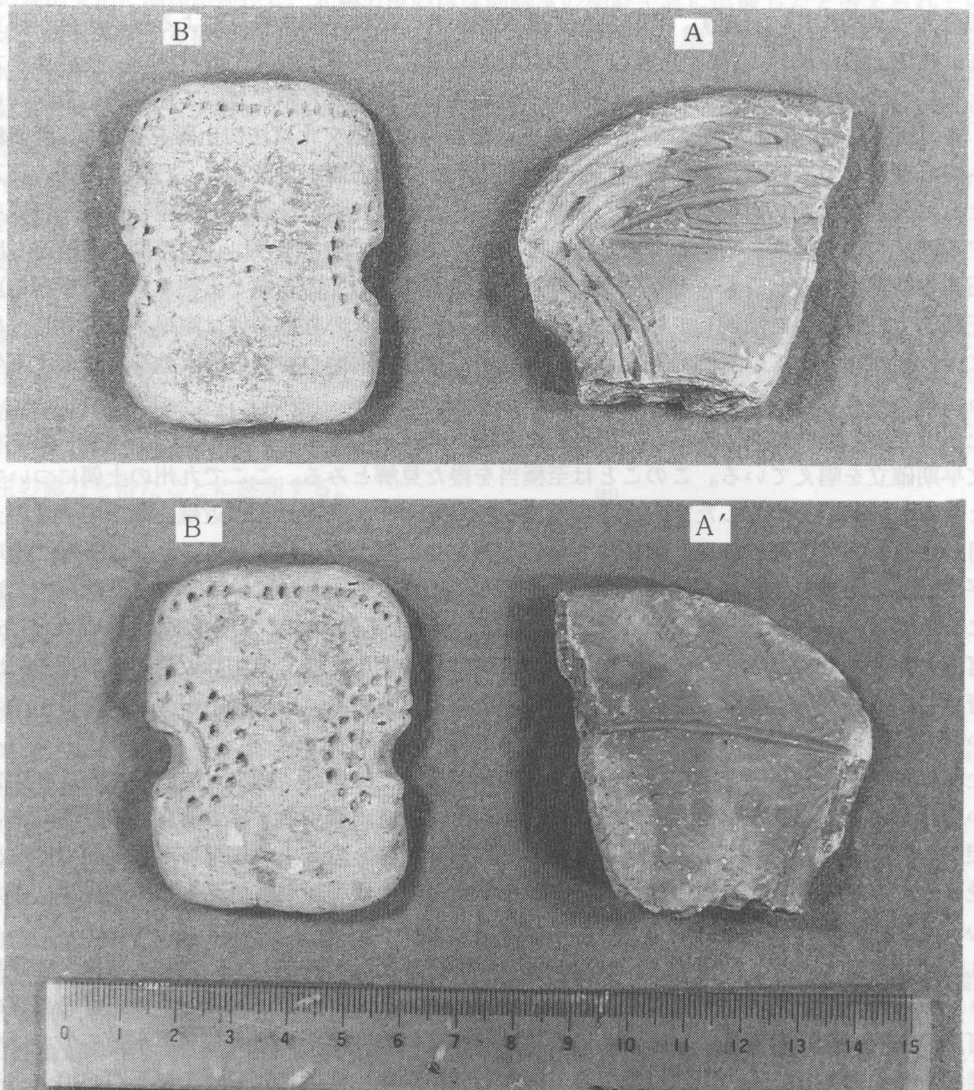
4. 土偶祭式の問題

縄文時代の土偶の原流を，稲作と関係して追求することは，これまでのところ周辺地域に事例乏しく具体的でない。まして中東，インダス地方に分布する地母神との関係には空白地帯が広すぎる。タイ北部泥像窯で製造され泥像，トウカタだけが，広い空間と時間的空白を無視して，体部分断(破壊）の祭式をもつことで土偶祭式と共通点がある。しかし，その源流各地域への拡散を考えても，稲作との結び付きは現段階で明らかにすることは出来ない。

土偶は稲作と無関係に日本列島で自生した特殊な呪術的泥像（神）であるのであろうか。この点について水野正好(14)は土偶祭式を次のように述べている。

「土偶祭式のもつ，受胎し，女性が死を迎え，のち新しい活力が誕生再生する過程を毎年実修することは，縄文時代早期に完全な形で成立している……その長い歴史を通じて受胎，死，再生といった輪廻をもつものであった。」

と述べている。たしかに土偶そのものがもつ基本的形態は受胎，妊娠の形をとる。そして出土状況は遺体分断，破砕放棄，即ち死をあらわしたものでもある。一部の土偶には再生の悦をみることができる。生産，放棄，という一連の土偶に関する運命をみる限ぎり受胎，死，再生といった輪廻



第５図　分銅形土偶，Ａ大分県下毛郡佐知遺跡，Ｂ大分県大野郡石五道原遺跡

の原則を否定できない。しかし，最近の西日本における土偶の出土状況から推理すると，縄文早期以来の土偶祭式とは別に，農耕儀礼としての泥像信仰を捨てきれない。

先づ西日本の土偶出土の時代背影をみよう。瀬戸内以西においては縄文後期初頭に太目の沈縄文で囲った内部を縄文でみたす文様が出現する。所謂磨消縄文土器であるが，その流れをみてみよう。いまのところ磨消縄文を構成する状況とその流れを総合すると沈線が曲線（中津式）的に描かれているところに発し，それが直線（福田ＫⅡ式）に変化する。更に口線部が肥厚し，縁帯文と胴部文

様が区別（津雲上層式）される。更に文様が直線的となり，ヘナタリ凝似縄文が目立ち，磨消縄文が横帯文（彦崎ＫII）をなす。次に精製土器が加わり，凹線文問に巻貝による扇状圧痕が目立つ。これに注口土器が加わる(福田ＫIII)。西瀬戸沿岸における後期土器文化の推移は，そのまま九州北部と同じである。特に津雲上層式に併列する磨消縄文の発達は九州において地域的に広がりをみせる。次の瀬戸内の彦崎ＫII式に対比される周防灘沿岸の土器文化は注口土器を共有し，磨研精整土器への転期となっている。更に打製石斧や横剝のナイフ形石器が量産され，石棒，石剣，石刀などとともに分銅形土偶が出現している。土器の精整化と，これら特殊遺物の出現は採集，狩猟を生業とする縄文文化の転期を物語るものと考えてよい。これまで知る限り，この時期の遺跡から出土する石器の種類をみると，もっとも重要な狩猟具，生産具としての石鏃と土掘り具（打製石斧）の比は圧頭的に打製石斧に傾倒していることがわかる。更にムラの立地条件は海岸平野，もしくは，それに近い河岸を占めている例が多い。このムラの立地は湿沢地や河床の滞水地を必要とする生業のあらわれとみることができるのでなかろうか。

土偶の発生，形態分類をみると，東日本に源流がある。このことについての土偶祭式論で水野は縄文早期確立を唱えている。このことは至極当を得た見解とみる。ここで九州の土偶についてのもっとも新しい問題を提起した宮内克己[16]の論文に注目しよう。宮内は先づ近畿，瀬戸内一帯の土偶を注目し，これまで近畿では14，瀬戸内では15遺跡からの出土をあげている。土偶は後期に出現し，扁平で頭部，四脚を省略し，沈線，刺突文をもって施文する，としている。そして瀬戸内の扁平土偶については，「東日本の影響をうけたとしても，後期の土偶の中には地域性の強いものがある。」

宮内のあげた資料のうち，山口県神田遺跡の例は「分銅形土偶」で，最近周防灘一帯での出土例と符合し，この地域での発生期的土偶の中に入るものと考える。以上宮内の考えは注目すべきで，東からの影響を認めながらも西日本独自の問題を提起している。

土偶は東方からの影響を否定するものではないが扁平で分銅形，縄文（沈線）または刺突文の形態からはじまり，それらの造形モチーフは広義の鐘ヶ崎式土器や西平式土器などの磨消縄文と沈線，刺突文の特徴にもとずいている。瀬戸内西部と九州北部にわたる土偶は東日本の土偶の影響を稀薄に受け入れながら，縄文後期中葉磨消縄文から精整磨研土器の転期に再発生し後期後半に西九州を中心に九州北半で流行したものとみられる。

九州における土偶は，分銅形土偶から妊娠女性形の再出へと発達し，いずれも破損，破砕して放棄されること，その祭式は東日本の例と共通している。祭式について前述の水野正好の考察を大きく訂正の必要はないが，生産輪廻方則の中に，稲作農耕の問題を考慮する必要があるのではないかと推理するのである。この問題にあたって打製石斧の量産，横剝ぎ打製庖丁形石器の出土，そして磨消縄文の衰退と精整土器化の発展背景をあげ，それを重視したい。

おわりに

東日本の影響をうけた土偶は，西日本で縄文後期にいたって分銅形土偶[16]として出現する。縄文早期からみられる東日本の土偶が長い空白期をへて後期後葉に西瀬戸地方から北部九州に影響したとする正確な論拠はいまだない。しかし西日本での土偶は磨消縄文の衰退と精整土器の出現といった時期に出現するのは何故であろうか。この時期の西日本に農耕が開始されたことを軽々に論ずることは出来ないが，近隣の中国では准水の北でアワを栽培し竜山文化を，南ではコメを栽培し良渚文化を形成している。いずれも耕作や土坑を掘る道具に打製石斧をもちいている。このような鉏(鎒)で耕作し，石庖丁で収穫していた。近年韓国南部固域貝塚[17]から西周時代長江下流の江蘇，浙江地帯で盛行した印文陶（湖熟文化）がみつかった。また前述の山東省楊家圏出土の稲穂は，紀元前3.000

年期に竜山文化に稲作が存在し，北緯37度のほぼ同緯度の朝鮮半島に伝播[18]したと考えられている。このような新事例から稲作が江南の良渚，湖熟文化の硬質黒陶や，華北の黒陶とともに比較的早い時期に西日本の沿岸低湿地，河床滞水地を可耕地として移入されたとみるのは，それほど唐突な考えとは言えまい。ここで改めて縄文後期後半の磨消縄文の衰退期と，それに変わる精整磨研土器の出現を重視したい。

さて土偶は中国先史時代にもしばしばみられるが一般に家畜としてのブタが多い。このブタの泥像が西日本へ影響したとは簡単には言えまい。

前述の水野正好の土偶祭式[19]について，

「受胎し，その女性が死を迎え，のち新らしい活力が誕生再生する過程を毎年実修する。」

とある。毎年実修するとするところは重要である。神事の呪術具は一般に破棄して再利用はしない。後のト骨，祭祀土器なども同様で，これらの祭式は一般的に農業祈願に多い。江坂輝弥が，食物質食資源の豊産を祈る対象物として中東の地母神と土偶との関連[20]を説き，これに蛇の装飾文を結び付けたのは，このような意味で興味深い。最後にタイ國泥像についての情報や資料について，山村道生の協力を得たことに感謝する。

註

(1) 古代オリエント博物館『オリエントの風貌展』(解説書)「最古の造形」—地母神像の系譜　1983。

(2) 江坂輝弥 「蛇の装飾ある縄文中期の土器」『民族学研究』第29巻第2号，1964。

(3) 宮内克己「羽田遺跡」『国東富来地区県営圃場整備事業開発発掘調査概報』1987。

(4) M. C. Subhadradis Diskul "SUKHOTHAI ART. " The Cultural Committee of the Thailand National Commission for Unesco, 1975　P.Charoenwongsa, M. C. S. Diskul "THAILAND" 1976

(5) Gregary L. Possehl "ANCIENT CITIES OF THE INDUS" 1979

(6) 八幡一郎「稲作と弥生文化」「稲・舟・祭」『松本信広先生追悼論文集』六興出版，1982。

(7) 上山春平・渡辺忠世『稲作文化』中公新書　1985。

(8) 渡部忠世，『アジア稲作の系譜』1983。『アジア稲の起源と稲作圏の構造』　別府大学附属博物館，1988。

(9) 厳文明，「中国稲作の起源と展開」(1988)『日本における稲作の起源と展開』日本考古学協会設立40周年記念シンポジウム，

山東省文物考古研究所，北京大学考古実習隊，1984「山東霞楊家圏遺跡発掘簡報」『史前研究』1984，第3期。

(10) 岡崎　敬「コメを中心としてみた日本と大陸」『古代史講座』13，学生社，1966。

(11) 河南省岡村地区文物管理委員会，鄭州大学歴史系「裴李崗遺跡1978年発掘簡報」『考古』1978年3期。

安志敏「裴李崗，磁山和仰韶—試論中原新石器文化淵源及発展」『考古』1978年4期。

(12) 浙江省文物管理委員会，浙江省博物館「河姆渡遺趾第1期発掘報告」『考古学報』1987年1期。

河姆渡遺跡考古隊「浙江省河姆渡遺跡第2期発掘的主要収穫」『文物』，1980年5期。

(13) 渡部忠世　1988年前掲論文

(14) 水野正好「土偶発式の復原」

(15) 宮内克己「九州縄文時代土偶の研究」『九州考古学』55号　1980。

(16) 小池史哲「原井三ツ江遺跡」『大平村文化財調査報告書』第5集，1989。

坂本嘉弘ほか，「高添台北の遺跡」『大分県大野郡千歳村高添地区所在遺跡の調査報告書』　1989。

坂本の調査による大分県下毛郡三光村佐知遺跡では鐘ヶ崎式後半の竪穴住居より磨消縄文技法の分銅形土偶がみつかっている。

(17) 東亜大学博物館「上老大島」付，東萊福泉洞古墳，固城東外洞貝塚，『古蹟調査報告』第8冊，1984。

(18) 西谷正，大村武「新彊ウイグル地区における農業『九州文化史研究所紀要』第34号，九州大学文化史研究施設，1989。

(19) 水野正好，前掲論文

(20) 江坂輝弥，前掲論文

The Mother Goddess of the Earth and the Ritual of the Clay Doll

The origin of the mother boddess of the earth worshiped in the Mdiile East can be traced to the clay figure of the Ubaid culture which reached its peak around 5000 B.C. The mother goddess emerged as a symbol of the earth and rebirth of plants ; while the male deity signified rain and heaven. The clay doll,(土偶), of the Jōmon Era with its exaggeration of reproductive organs are also believed to have appeared as magical instruments in the ritual which prayed for fecundiy and rebirth. The Jōmon people subsisted on cunting and the people around the Indus River raised wheat. Because of this difference in subsistence and the date of appearance also very much apart, some scholars endow totally different meanings on these two kinds of seeminly similar female caly figures.

However this position might not be tenable if we look at a third type produced in the Kho-Noi kiln around the 14th century, a kiln in northern Thailand specialized in making clay dolls. There we find rituals in which clay dolls were destroyed and abandoned as the ones in Jōmon rituals. "That is the Thailand people made female figures and destroyed(Killed)them, wishing for their rebirth. Since the Thai clay doll was used in rice-cultivation rituals, it might be possible to relate the Jōmon one to agricultural rituals.

The Jōmon clay doll which had first appeared in the eastern parts of Japan disappeared around. It again appeared, after a long blank, in the western parts of Japan. If the date of its reappearance corresponds with the beginning of agriculture, we can safely conclude that the clay doll of Japan is also considered as an agricultural deity as the mother goddess of the earth in the Middle East. This paper examiness the meaning of the clay doll of the late Jōmon era.

—平成元年９月30日受理—

(本学教授・考古学)